
東方働楽録

辻虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

01 - アルバイターの朝

鞆に大量の新聞紙を詰め、地を蹴り、冬の早朝を駆けている男が居た。

白い息、先日降った雪は道の端に集められ、一〇 以下だと言うのにマフラーも手袋も着けず、薄着な格好とボロボロの靴で男は駆けていた。

決められたルートを通り、尚且つ氷や雪に足を取られない様に男は寒い中、走り続けていた。

男の住むアパートはボロボロだった。

風呂はあるものの、一人が限界の狭い風呂。

木造の床はギシギシと悲鳴を上げ、何時天井が落ちてきてもおかしくないほどのボロアパートだった。

「ただいまあ」

男は一人暮らし、親戚、家族、兄弟も居ない、勿論彼女も居ない、生まれた頃から一人つきりだった。

中学に孤児院を抜け出し、一人必死に生きる為に始めた新聞配達も既に五年目、今年で歳に十九歳なる。

そんな男の家に見ず知らずの女性が居た。

「……………どちら様で？」

「いきなり無愛想な挨拶ね、若津^{わかづみなと}皆人さん」

「何で俺の名前を？」

彼女は懐から出した紙をヒラヒラと皆斗に見せつける。

何処がで見覚えのある紙に皆人は眼を細め凝視した。

「俺の履歴書！」

履歴書、アルバイトだけでは生きて行けないと感じていたので一週間ほど前に出した物だった。

初めて書いた履歴書、不愛想な顔写真が貼ってあり、字も多少汚い。

「って事は……………」

「ボーダー商事社長の八雲紫です」

「すみません、こんなボロ屋で」

「いいえ、こちらこそ勝手にお邪魔したし」

「あの、粗茶ですが」

紫の前にお客様用の少し高め緑茶を出す、と言ってもコンビニや自販機で売っているペットボトルの物と同じである。

彼の家では最低、茶葉は七回ほど繰り返し使うので、カフェインが少なく寝る前には意外に好評である。

「大丈夫よ、私は七十三使い古した茶葉のお茶を飲んだ事が在るわ」

「二桁で五十越えって……………」

「金銭的な事には五月蠅いのよ」

「そうですか」

自分もボロボロの卓袱台の前へと座る。

コホンと咳を一つした紫は懐から出した扇子を広げ、口元を隠すと皆人に聞こえる音量で呟いた。

「合格」

「えっ？」

「採用とでも言いましょうか？ ボーダー商事社員として貴方を向かい入れます」

「……………」

持った湯飲みのお茶を飲まず、皆人は硬直していた。

「あらっ、不満かしら？」

「い、いえ！ とても喜ばしいのですが、面接とか試験とかそういうのは？」

「面倒くさい」

「え」

拍子抜け、今から面接でも始まるのかと構えていた皆人は胸を撫で下ろし、肩の力が抜けていく。

「ただし、条件があるわ」

「はい？」

「貴方が私達の世界でまともに生きて行けるのなら採用、無理なら諦めて貰うわ」

「いや、あの試験が無いつて言ったのは？」

「今思いついたのよ、如何する？ 特に取り柄も無く、この平穩過ぎるこの世界に納得する？」

「……………」

折角の申し出、態々こんなボロ屋まで、社長自身が出向いてくれたのに断る事など出来なかった。

「分かりました、入社試験受けます」

「……………真っ直ぐな眼ね、それじゃあ三ヶ月後に」

紫が指を鳴らす。

その瞬間、何も無かった視界の先に切れ目の様な物が生じる。

切れ目はどんどん大きくなり、人一人が余裕に入れる位に拡大した。

「それでは、行きましようか。貴方は今日外界からの縁を切り、忘れられた者とされるわ」

「ちよっ、アンタ人間か！？」

「あら、ごめんなさい。私は人間ではなく」

後退りの態勢を取っていた皆斗だが、自分の足元にも紫の入ろうとしているソレが在る事に気付く。

「妖怪よ」

重力に逆らえぬ人間は下に落ちるだけ、足掻いても下へ、暴れても下へ、謎の空間を数秒間落下していると視界に見た事も無い光景が広がる。

「何処だよこい」

自分が落ちる事さえも忘れ、現代の日本から想像もできぬ緑豊かな世界が皆人の心を奪ったのだ。

風を切る音が耳を支配し、他に何も聞こえない中、何故か耳に紫の音が聞こえてきた。

「ようこそ、幻想郷へ」

01 - アルバイターの朝（後書き）

主「初めての方、『家出男シリーズ』で面識のある方、どうも辻虎です。

今回は新作となっており、妖怪の山が中心です。

出ないキャラクターもたくさん出ますが、それでも温かい目で見守ってくれたら幸いです」

02 ニアルバイター川流れ（前書き）

初めて自分の作品を見てくださる方へ、

この作品の投稿は毎週月曜、木曜、土曜となっています。

偶に体調が悪くなり、休載するかもしれませんが、

2828パルパルしていただければ光栄です。

すまない……………今回も自重できない！

02 - アルバイター川流れ

「冷えますね」

「そりゃ、既に十二月だからね」

妖怪の山の山道、川沿いの道を行く二人の姿があった。

白銀の白い髪を風に靡かせ、マフラーと手袋でしっかりと防寒武装した白狼天狗、犬走椀と、防寒具も着けず、寒さなど感じていない河童の河城にとりであった。

「にとりは冬眠とかしないんですか？」

「今年の私は発明年越しでもしよつかなくて、一年中暖かい空気が私を包む様に『温かくなーるベルト』を……………およ？」
にとりは足を止め、川に流れる何かを見つめていた。

「如何した？」

「うーん、何か変なのが流れてるよ」

川には何故か親指を立てた右手の様な物が流れていた。

「アレじゃないですか？ あのラストシーンに溶鉱炉に入って行く、体が機械の……………」

「あー、たぶんそれだと思っけど、何か違和感が……………」
流れて行く腕の近くで空気の泡がプクプクと上がって行く。

「生きてますにとり、救助を！」

「オーケー、『のびーるアーム』行けえ！」

「ダイハードは1と2が面白……………い？」

目を覚ました直後、港の視界には白髪と青髪の現代から考えればありえない髪の色少女が目の前に立っていた。

「アレ？ マクレーンは？」

「おっ、起きた？ 盟友」

「め、盟友？」

「あ、眼が覚めましたか？」

後ろを向いていた白髪の少女がこちらを振り返る。

「何故こんな季節に川で溺れていたんですか？」

「やっぱね、4はCGに頼り過ぎなわけですよ、それに比べたら1と2は最高、あの人本当に毎年が厄年だなんて……………ああ、えっと、その」

率直に言うと言えはいいのかわからない。

翌々現状を確認すると白髪の少女はスタイルも良く、胸も手に収まるほどで犬耳と尻尾の生えたファンタジーの塊、小型の機械をドライバーで弄る青髪ツインテールの少女、大きい胸が視界に入る、普通の人だったら『何これ何処の喫茶店？』と言いたい。

「えっと……………」

「ん？ 自己紹介がまだだったね、私は河城にとり、この工房で色々作ってるよ、今は八十八？高射砲とか作ってるけど、見る？」

アハト・アハト、現代ではこの名前の方が認知度は高い。

明らかに人間一人が作れるものではない、ましてや小柄な少女がこんな物を作れるとも思わない。

「私は犬走椋、この山一帯の警護をしています」

「犬？ パシリ？ もみもみ？」

「斬りますよ？」

「すいません調子乗りました」

「俺の名前は若津皆人、外の世界から来たただのアルバイトだ」
「あるばいたー？」

にとりは機械を弄りながら興味あり気に声を漏らす。

「決まった職に就かないで、色々な経験と知識を得る職業、まあ今は少し違うけど、今はボーダー商事に入れるかどうかの試験中なんだ」

「ボーダー……………ああ、スキマ妖怪の」

「中々の弄りっぷりだね」

「おや？ 君も弄りの経験者？」

「バイトでは色んな人と出会いますからね、多少の弄りは出来ますよ」

「弄り談義で盛り上がりたないでください！」

前屈みになり、尻尾を押さえている椀が涙を流しながら抗議の声を上げる。

「少しやり過ぎたんじゃないですか？」

「まあ、良いんじゃない？」

「……………ですね」

キシヤーと猫の様な威嚇をし、こちらを睨みつける椀、皆人は宥める様に椀の下顎をゴロゴロしてやる。

すると次第に気分が落ち着き始め、犬が喜んでいる様に尻尾をパタパタと左右に揺らしていた。

「自分は何すれば良いですか？」

「ん？ そうだなあ、文の所でも連れて行ってあげたら？ 椀」

02 - アルバイター川流れ（後書き）

主「ダイハード四週連続とかマジキタコレ！ 海外の映画好きなん
ですよねえ」

特にアクション物とか」

皆「働かないとホームアローンのDVD割りますよ？」

03 - アルバイターの職

妖怪の山、椈をお供に、にとりの工房からさらに上へと登り道中。

「『文々。新聞』……………中々本格的な新聞だな、俺は学級新聞程度だと思つてたんだが」

「絶対にあの人の前では言わない方が良いでしょう」

新聞を広げ、険しい山道を歩く、皆人は足場も確認せずに足を進めるので数回転げ落ちていた。

「まあ、ここまで出来が良ければ十分でしょ、たった一人でここまで書けてるなら」

「まあ、私が手伝わされる事が度々ありますが」

椈の愚痴や、皆人の居た現代の話をしながらも足を進め、半時間ほど経った頃に目的地である家に着いた。

「ウッドハウス……………中々豪華な家をお持ちの事で」

木の上にある家、木には何表札の様に『射命丸文』と彫っていた。「ハシゴとか無いので、私に捕まって……………」

皆人は椈の言葉に耳を貸さず、アクロバットな動きにとりの工房から拝借したワイヤーを使い、木をいとも簡単に登り切った。

「人間ですか？」

「人間ですが？」

「失礼します」

椈を先頭にし、文の家へと入って行く。いきなり知らぬ顔の男が入ってきたら驚くだろうからである。

部屋の中は至って綺麗だが、壁に写真が万遍無く貼られている。

刑事ドラマに出てくる、バツ印がされている写真や、中には生着替え、スカートの中の神域写真もある。

「ですからして！ 私も一人の乙女であるわけで男性と同衾するの

「は些か無理があります！」

「異性を意識していいのは若い娘だけよ、私みたいな十七歳の……」

「貴方だけには言われたくありませんし、てか堂々と年齢詐称しないでください！」

部屋の奥で聞こえてくる二人の声、一方の怒鳴り声には覚えが無いが、片方の声には聞き覚えがあった。

「私はもう冬眠したいの、悪いけど後はよろしく」

「あ、ちよっと！ はあ………どうぞ」

不機嫌な声に呼ばれ、椀と皆人は部屋の奥へと進んで行った。

「ど、どうも」

頭を軽く下げ、部屋へと入る椀を先頭に俺は怒鳴り声の主の顔を見た。

第一印象は『鴉っぽい』だ。

背中から鴉より大きく黒い翼、得物を狙う鷹の様な鋭い眼光、綺麗だと言言葉も出てきたが、初対面の相手にいきなり言う事ではないので口を噤む。

「貴方が皆人さんですか、私は射命丸文と言います、お話は聞きましたよ」

彼女は誰かと言わなかったが皆人は誰か理解できていた、紫であると確信に近い物を持っていた。

「貴方は私の家で居候する事になりました」

「え？」

「そう言う事なのでよろしくお願いします」

彼女はそう言うと、家を出て、自前の翼で飛んで行ってしまった。

「はあ、困りまったわ」

素性が解らない今、あの皆人と言う人間には優しく接するのは危険であった。

これは素性や人柄が解らないからではなく、一つ屋根の下、知り合っただばかりの男女二人で暮らしていく事は女性にとっては怖い事だ。

相手は人間、実力行使すれば追い出す事など容易い、だがスキマ妖怪に弱みを握られている今、そんな事すれば確実に『伝統ブン屋』の危機である。

「まあ、様子見として一週間、それで何かしたら文句を良い付ければ良い話、ちよつとだけ辛抱よ」

彼女は呟き空を舞っていた。

「んで？ 紫さん、見てるんでしょ？」

「バレた？」

「バレてますよ」

スキマから上半身を出し、現れた紫、手に袋の様な物を持っていた。

「手荒い歓迎でしたね、真冬の川落とすなんて」

「仕方ないじゃない、だって眠かったんだし」

「はあ、貴方のやりたい事がイマイチ掴めないんですが……………」

「掴ませない様にしてるからよ」

何を言っても無駄だった、まるで初めから皆人の言う言葉を知らずに対策を立てている様な、何が飛んできてても対応できるプロだ。

「でも如何して射命丸さんの協力を受け入れて貰ったんですか？」

「簡単よ、ちよつとお願ひしたら簡単に引き受けてくれたわ」

嘘だと簡単に分かった、彼女のポーカーフェイスの裏に何か黒い邪気の様な物を感じる。

脅迫の他に何も無いだろう。

「ねえ、貴方は元の世界に帰りたい？」

「まだ来て五時間ほどですか……………まあ、帰りたくは無いですね」

「何故かしら」

「ここは綺麗な所です、その反面、現代では有り得られない恐怖や

冒険が待ってます。あんな腐った世界よりはマシですよ」

ゴミを見つめる様な蔑んだ目で天井を見つめる、その眼は怒りで満ち溢れている様な、恐怖に苦しんでいる様な眼をしていた。

「自分の居た世界を侮辱出来るとは……………何かあるのかしら？」

「『ある』と言つよりは『あつた』ですかね、男の過去は検索しない方が身の為ですよ」

「火傷でもするのかしら？」

相変わらずの無表情、だが紫の何かを知ろうとしている事を皆人は感じていた。

皆人は今できる最大の作り笑いをし、小声で呟く。

「さあ？」

03 - アルバイターの職（後書き）

主「俺も幻想入りしたいなあ」
皆「変なフラグ建てるな」

04 - アルバイターに出来る事

アルバイトの基本は色々である。

接客業なら『笑顔』『手際』『キャラ』が大切である。

裏方業なら『技術』『技量』『手際』内容にもよるが、技が必要なのは理解して貰えただろう。

場所、時間、内容の全てを理解し、自分がすべき事をいち早く見つけ、行動する。アルバイト共通の初歩である。

「と言つても……………」

文の家は綺麗であった、写真や資料が散らかっている所は触らないのが鉄則、容易に動かし、相手の気を損ねたい為である。

「料理は作るとして、材料が無いな」

昭和辺りに導入された昔ながらの冷蔵庫の中にはそれほど材料も無く、元氣ドリンクらしき物、賞味期限の切れた野菜が散乱していただけだった。

「買い出しでも行くか」

外界の通貨はこの世界では売れるらしい、紫に頼んで貯金全額を下ろして貰ったが、大して多くはない、ゲーム機が三つ買える程度だ。

数年間頑張つて貯めた貯金がこれだけなのは理由があつた。

育ててくれた孤児園への寄付である、出て行つたとは言え育ててくれた親の様な物だったのでバイト代の半分は寄付をしていた。

「そのお蔭で生活はカツカツだったんだよなあ」

「そうだったんですか」

椀に頼み、山を降り、香霖堂へと買い物へ来た。

香霖堂、リサイクルショップとでも言えば良いのか、武器や雑貨、レトロゲームや今は忘れ去られた過去の栄光の皆さんがずらりと並

んでいた。

「待たせたね」

店主である森近霖之助が奥の部屋から出て来る。

「まあ、君は外来人だし、多少多く見積もつといたよ」

野口、樋口、福沢の三現神……………基三現金にお別れを告げ、売り払ったのだ。

「ありがとうございます、あの……………少しいですか？」

「何だい？」

香霖堂でお世話になり腰に黒い小包を下げ、里へと来た。

「何を購入したんですか？」

「ん？ ああ、まあ物騒らしいから護身用の為に武器の一つでも、これでも喧嘩は強かったんだぞ」

「そうですか、まあ、私が居る限りは危険な事にはならないと思いますよ」

「そうだと祈るよ」

里は賑やかだった、時代背景がごちゃ混ぜになっており、頭が混乱しそうだった。

現代風の服を着ている店があれば、和服に身を包む店もあり、現代からは遠く掛け離れていた。

「とりあえず買物でもしますか」

「そうですね、文さんは大抵何でも食べますが……………」

「すみません、鳥肉ありつたください」

皆人は椀の小柄で可愛い拳骨をお見舞いする事になった。

04 - アルバイターに出来る事(後書き)

主「急いで投稿したから文に切れがないな………」
皆「頑張れ」

主「もうちょい励ましの言葉何とかならないか？」

05 - アルバイターの和解

「はあ、如何しましょうかあの人間」

夕暮れ、朱色の空を自前の黒い翼で舞う文は皆人の事で頭を悩ませていた。

一人で勝手に飛び出し、皆人の件を放っておいて新聞のネタを探しまわっていた。

「まったく、厄介な相手に眼をつけられたわ」

ポケットから取り出した写真には紫、神奈子、永琳、聖、幽々子の密会写真。

これが今回の件の発端であった、この写真を使い『文々。新聞』の購読者を増やす事が目的だったが、何処から情報が漏れたのか、これを紫が『幻想郷五大老の密会』とかなんとか難癖を付け、皆人を押しつけたのだ。

「まあ、あのスキマ妖怪が進めるのなら問題は無いし、椀もわんこの勘とかで警戒していなかった……………一週間ほど様子見ね」

「……………」
自宅に着いた文だったが家の前で息を殺し、そつと中を覗いていた。

「料理上手ですね」

「数年も一人暮らしだったからな、お袋の味ぐらいだったらちよつとは再現出来るぞ、『肉じゃが』『煮つ転がし』『野菜炒め』『ポトフ』、一番得意なのは『目玉焼き』」

「そこまで出来れば十分だと思いますが」

椀と皆人が台所に立ち、料理を作っていた。

まるで新婚の夫婦みたいな雰囲気醸し出しているので腹立たしい。

「いやあ、何故か食事中に涙を流れましたよ」

「何故でしょうか、懐かしい味に涙が流れました、玉ねぎとか入れてませんか」

「玉ねぎで涙が出るのは切る時だけ、あと、玉ねぎを切る際は鼻に詰め物をするか、口で呼吸をすれば泣かないぞ」

皆人の料理を初めて食べた二人は涙ぐんでいた。

「お袋の味って言うんだよねえ、最初の人は俺の料理食べると何故か泣くんですよ、『懐かしい』『心が温まった』とか言ってる」

食器を洗いながら会話を進める。

「俺、親の作った料理食べた事無いんだ、偶に近所の方が料理作ってくれるけどその味をすっかり覚えてさ、この味が俺にとってのお袋なんだよな」

「孤独な生活は苦しかったですか？」

「そこそこ、近所の方が偶に親切にしてくれたから大丈夫だった」

「へえ、と言うかその近隣の人を置いて幻想郷に来てよかったんですか？」

「良いの良いの、どちらかと言うと置いてかれたのは俺だから」

「えっ？」

「それより、椀、帰るの？」

「はい、ここに居ると尻尾を撫でまわされそうなので」

尻尾を押さえ、文を警戒しだす椀、文は手をワキワキと厭らしく動かし、戦闘態勢に入った。

「文さん、そこまでにしましょう、また明日触らせてもらえば良いじゃないですか」

「そうですね、明日は首輪を持って行きましょう」

「趣旨変わってないか？」

夜の妖怪の森に笑い声が響く。

空に散らばる星は地を照らし続けていた。

そして男の幻想郷での生活の初日も幕を閉じかけていた。

番外編 - アルバイター秘密の夜その一

「寝たか……………」

皆人は文の就寝を確認すると外へ出た。

夜を照らす星空の下、皆人はポケットサイズの日記帳とペンを取り出し、星明りを使い、日記帳の最初のページに何かを書き始めた。

『十二月一日

香霖堂で購入した日記とペンに今日から一ページずつ日記を付けようと思う。

幻想郷はとてもいい所だ、問題無く日々を楽しく過ごせるだろう。今回付ける事は幻想郷での生活についてだ。

妖怪と戦闘に入った時、どう対処すればいいのか。

紫さんにも話を伺ったが、眼には眼を妖怪には妖怪をと言う事だ。どうも彼女は少し抜けている点がある。

現代での生活は醜い物だらけだった、

せめてこちらではマシな生活を送りたい。

追伸、アルマゲドン見たかったな』

「この位か？」

日記帳を閉じ、ポケットへと突っ込んだ。

「月が綺麗だな」

幻想郷初日、衝撃と環境の変化の所為で何故か寝付けない、未知の世界に興奮しているのか、明日から妖怪と共に送る生活に怯えているのか、理由は解らなかった。

「退屈はしないと思うけど、まあ、自分次第か……………」

ただ一つだけ、理解できる感情があった。

絶対的な孤独感、別に寂しいわけではない、だが顔見知り居ないだけで心に穴が開いた様だった。

「ちとと……………明日から頑張る為に寝ますか」

05 - アルバイターの和解（後書き）

主「昨日は良かった、特に飛行機が空中ではじけ飛んだ時が」
皆「オイ、執筆しろイピカイエ」

番外編・アルバイター秘密の夜その一

「寝たか……………」

皆人は文の就寝を確認すると外へ出た。

夜を照らす星空の下、皆人はポケットサイズの日記帳とペンを取り出し、星明りを使い、日記帳の最初のページに何かを書き始めた。

『十二月一日

香霖堂で購入した日記とペンに今日から一ページずつ日記を付けようと思う。』

幻想郷はとてもいい所だ、問題無く日々を楽しく過ごせるだろう。今回付ける事は幻想郷での生活についてだ。

妖怪と戦闘に入った時、どう対処すればいいのか。

紫さんにも話を伺ったが、眼には眼を妖怪には妖怪をと言う事だ。どうも彼女は少し抜けている点がある。

現代での生活は醜い物だらけだった、

せめてこちらではマシな生活を送りたい。

追伸、アルマゲドン見たかったな』

「この位か？」

日記帳を閉じ、ポケットへと突っ込んだ。

「月が綺麗だな」

幻想郷初日、衝撃と環境の変化の所為で何故か寝付けない、未知の世界に興奮しているのか、明日から妖怪と共に送る生活に怯えているのか、理由は解らなかった。

「退屈はしないと思うけど、まあ、自分次第か……………」

ただ一つだけ、理解できる感情があった。

絶対的な孤独感、別に寂しいわけではない、だが顔見知り居ないだけで心に穴が開いた様だった。

「さてと……………明日から頑張る為に寝ますか」

番外編・アルバイター秘密の夜その一（後書き）

主「『裸Yシャツ真理教』か『裸タンクトップ正義教』………」ど
つちを立ち上げればいいと思う?」

皆「何考えてんだオイ! 執筆しろ!」

06 - 求人

時刻は既に昼、

「あやや？ 皆人さん如何しました？」

「ん？ ああ、文。ちよつと、人間の里で求人板見てこようかと思
いまして」

「……………その変な言葉遣い止めない？」

「へっ？」

「敬語と標準語の混ざり合う口調はもう止めないって相談ですよ」

先日からも文は違和感を持っていた、稀に敬語を使ったり、標準
語に戻ったりと変な口調には文は疎外感に似た物を感じていた。

「標準語が良いですよ」

「そ、そうか？」

「と言うか、何で仕事探しに？」

「働いてないと生きた心地がしない人間なので……………」

「寂しかったら死ぬ因幡の兔ですか、貴方は……………ここで働い
てください」

「でも……………」

皆人は文の大体の事を椀から聞いていた、皆人が悩んでいるのは
『幻想郷最速』の件である。

幻想郷最速、人間の方にも候補は居るらしいが、『努力家』と言
う二つ名があるので却下されたらしい。

字が汚い、飛ぶ事は出来ない、出来る事は炊事に洗濯、家事程度
それならば里の居酒屋辺りで雇って貰おうと思ったのだ。

「助手じゃダメですか？」

「助手？」

「ええ、永遠亭なら飛べる薬ぐらい作って貰えそうですし、それに
貴方はここで私と共に過ごしますので一緒に居た方が良いかと」

「一理あるけど……………」

それは確実に人間を辞めるルートだった、だが、『足手まとい』の烙印を押されるのも時間の問題だった。

「まあ、行くだけ行ってみましょうか」

「し、視界が……………これがブラックアウトと言うものか」
文に抱かれた皆人は音速のスピードで飛ばれ、Gと風圧のお蔭で意識が朦朧としていた。

「大丈夫ですか？」

既に千鳥足の皆人は竹に凭れかけ、ゆっくりと休んでいた。

皆人と文の居る迷いの竹林、竹と竹との間から眼を光らせる一兎が不穏な笑みを浮かべていた。

「ウサウサ、今日は生きの良い得物が二人ウサ……………」
指を鳴らすと足元に無数の兎が集う。

「さあ、行くウサ！」

その一言を合図に白兎は方々へと散って行った。

「パーティへようこそ」

「ふむふむ、その映画と言う物は中々面白そうですね」

「ああ、特にダイハードシリーズが一番のお気に入りだな、でも最近は体を張ったスタントが無いから残念、格闘だったらジャッキーシリーズかな」

竹林の中を二人で休憩がてら歩く、右も左も前も後ろも竹一色、まるで迷った様だ。

「迷いましたね」

「だろうと思っただよ」

「まあ、飛ばば何とかかなります」

「その代わり音速の壁を超えないでくれ、体が持たない……………」
「…つてアレ？」

隣に居た文はまるで蒸発したかの様に跡形も無く消えていた。

「おーい、文？ ぶっ飛びガール？ 幻想郷最速？」

「ここですよー」

声の聞こえる方を見るとまるで誰かが掘った様な穴があった、近くには『細い木の枝』『木の葉』等、落とし穴製作に使われたアイテムが散布されており、悪意的に作った物だと分かった。

「大丈夫ですか？」

落とし穴を覗き込み、現在の文の状況を確認する。

「ええ、でもとりもちみたいなのに体の自由を奪われました」

「如何すれば良い？」

「そうですね、背後に気を付け、近くに居る兔を叩きのめしてください」

「背後？」

ゆっくりと振り返ると小さな白兔が自分を押し込んでいる事に気付く。

「兔……………」

可愛らしい瞳をウルウルとさせ、こちらを見つめる兔達。

「兔……………」

可愛らしい兔を見て涎を垂らし、一度唾を飲み込み喉を鳴らす。

「兔の肉は引き締まった足が美味いと聞くが……………お前等は如何なんだ？」

皆人はまるで人が変わった様に兔を見つめる、そう、貧乏人にとつて『肉』とは猫に鯉節、馬に人参、貧乏巫女に白米である。

「兔鍋……………」

可愛い兔は恐怖に駆り立てられ、赤い瞳に涙を溜め、ガクガクと震えていた。

「今晚は兔料理かな？」

押している兔の塊を文の落ちた落とし穴へと投げ入れる。

「ぎゃあああああ！ 謎のモフモフが私を潰すうううううう！」

「スマン文、俺、兎狩りに行ってくるわ！」

「おっと、勝手に私の配下の兎を捕まえなるなウサ」

皆人の背後から足払いで皆人をこか

「どちら様で」

「因幡てゐ、ちょっと……………」

「ああ、皆人さん、そいつ捕まえてください」

「オーケー」

「ちよっ、人の話は最後まで聞くウサ！」

06 - 求人（後書き）

主「来週の月曜は俺の誕生日！」

皆「10月24日か、おめでとう」

主「その次の日に修学旅行！」

皆「ハードスケジュールだな……………」

主「その週の土曜に同人誌漁りに大阪へ」

皆「が、頑張れ」

07 - 狩人（前書き）

十五歳になりました、とりあえず盗んだバイクで走りだしたい。

07 - 狩人

皆人は腰に下げているの黒い袋から武器を取り出した。

「さあ、新しい武器のお披露目だ」

取り出したのは『メリケンサック』、主人公が持って良いとは思えない赤と黒の交わったカラー。

持ち主である皆人自身も目が本気だった。

「もふもふう」

蚊帳の外ではなく、穴の中、兎の高級毛皮の布団で文は違う意味で昇天しかけていた。

「仕方ないウサ、この迷いの竹林最強の武人である私に素手で挑もうとは……………」

「えっ最強！」

「嘘ウサ」

てゐ皆人の一秒の隙を狙い、背後へと回り込んだ。

音等は聴覚に入らず、気配も消し、一瞬で背後へ回り込んだ。

何処から取り出したか解らない杵で皆人の後頭部を殴り付けようと大きく構えるが、いち早く殺気に気付いた皆人は前へ飛ぶ。

「人間は騙しやすいウサね」

杵を軽々と片手で持ち上げているてゐ、皆人はメリケンサックをはめ、走り出した。

「真っ向勝負……………受けて立つ！」

土壇場の野球選手気取りで杵を構える、片足を上げ、杵を強く握る。

「今ウサ！」

てゐは杵をバットでも振るかのように一本足打法を決めた。

皆人はメリケンサック装備の右フックを杵に向かって放つ。

両者の武器はゴツと言う鈍い音と共に砕けた。

てゐの杵は粉々に砕け、少し長い棒だけが残り、皆人のメリケン

07 - 狩人（後書き）

主「明日から修学旅行、感想の返信は木曜日になります。

東京でまずはナズーリンの元ネタの東京デイズニ……ゲフンゲフン！に行つてきます」

皆「お土産よろしく」

08 - 竹林の奥

皆人は文が満足するまで小一時間ほど待った。

実際は文は何故か布団にされていた兎達に救出された、今も皆人の背中でごっすりである。

てゐは置いて行くのは可哀想だと判断したので左腕で抱きかかえてお持ち帰り中。

「まったく……………」

右手の拳は砕けた、正確には人差し指と中指の骨が完全に折れていた。

実質、悪いのはてゐである、だが武器を構えた自分にも非がある為に怒れない。

「分かれ道か」

二手に分かれる道、丁度目の前に右『永遠亭』、左『コロンビア』と書かれた看板が立っていた。

「コロンビアって……………」

そこへてゐの配下の兎が皆人の先頭へ現れた。

兎は迷わずコロンビアに向かった。

「コロンビアに行けと？ まあ騙されたと思って行きますか」

迷いの竹林の奥深く、永遠亭。

「てゝゐ？ 何処に居るの？」

ブレザー姿の少女、真っ赤な瞳にてゐとは違った長く、長く伸びているウサ耳少女が箒片手に歩いていた。

「まったく掃除サボって……………ってアレ？」

「あ、人……………モドキっぽいのが」

兎に導かれ永遠亭に辿り着いた皆人、汗臭さが鼻を刺し、汗が視界を濁らせる。

「すみません、この兎の知り合いですか？」

「あ、はい」

「自分はこの背中の射命丸文の……友人の若津皆人って言います、あのとりあえずコイツを……」

そう言っただけで左肩のてみを目の前のブレザー姿の少女へ渡した。

「私は鈴仙・優曇華・因幡、てゐの事はありがとうございます、てか何でこんな状況に？」

「てゐ、悪戯、死闘、無力化、後二時間で目を覚ます」

「いや、そんなキーワードだけ並べられても……まあ理解は出来ましたけど」

何故か警戒されているのに気が付いた、確かに人間が妖怪二匹を背負っただけでも不思議がられるだろう。

「あと、出来れば包帯とか貰えませんか？」

骨の折れている右手をうどんげに見せる皆人、うどんげは警戒心を解き、潰れた拳を触りだす、てゐと一緒に屋敷に入って行くと薬と救急箱を持って来た。

「大丈夫ですか！？」

「ちよつと右拳が粉碎しただけなんで気にしないでください」

「気にしますよ！ 大方、てゐの悪戯で怪我したんですね」

「クロスカウンターしようとしたら杵に大粉碎ってわけですよ」

「意味がわかりません」

如何でも良い話をしながらうどんげは必死に包帯を巻く、そこで相方の文が目を覚ます。

「ハッ！ 椀と八雲藍のふわふわ尻尾地獄が消えて行く……」

「……おや、如何しました？」

「役に立たない上司を背負って来た自分が馬鹿みたいに思えてきてるんですよ」

はあとため息を吐き、肩を下ろす。

「アハハ、まあ、中に入ってください」

永遠亭の中は広がった、あちらこちらにバイオマークが部屋にあつたり、中にはもう異臭と謎の呻き声も聞こえて来たりする。

「何かもう敵の本拠地並みの緊張感なんだけど、セーブポイントくれない？」

「人生にそんな物が在ってもセーブ前に電源がブツンですよ」

「私のトラウマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「のわっ！ 貞子かと思つたわ！ てか誰？」

「私は蓬莱山輝夜、なあに気軽に姫様と呼びなさい」

「二トですよ」

文が横やりを入れる、二トと言う言葉を聞くと皆人の眼が光る。

「……………二トは社会の敵だ」

「私を敵扱いするなんて……………良いわ、私と勝負しなさい！」

「何だ？ ポーカーか？ ババ抜き？ それとも大富豪？」

「いいえ、モンハンよ！ どっちが優秀か勝負！」

「わかつたけど、ちよつと待ってこつちの仕事もあるから」

「永琳さん、どうも射命丸文です」

「あら、如何したの？ 新聞のネタ何か無いわよ」

白衣に身を包む女性、八意永琳、さっきの二トの家庭教師的な人物だがこの家の家計の約九九%が彼女の薬で形成されている。

「いえいえ、助手が出来たのですが、飛べなくて困っていたので秒速三六〇mで飛べる薬がほしいんですが」

「それって音速ですよ、軽く人間辞めますよ」

「貴方が……………」

永琳はまじまじと皆人を見つめる、興味を持っている様な、何かを期待している様な眼である。

「貴方………うとんげ 兎は何処が一番おいしいと思う？」
「兎ですか……… もも肉だと思いますが」
「太股ももねえ、中々良い趣味ね」
「は、はあ………」

「何故でしょうか、お互いの話あっての内容は違うのに」ここまで
噛みあう謎のシンクロー率は………」
「私も何故か悪寒が………」
天才と変態は紙一重であった。

08 - 竹林の奥（後書き）

主「話のストックが切れたので一時休載とします、次の投稿は来週の木曜にします、ごめんなさい、修学旅行の疲れを取ります、それじゃあいっちょ大阪で同人誌漁りじゃああああああああああああ！」
皆「メツさ元気やん」

09・記者見習いの試練

カメラのレンズから夕暮れの妖怪の山を覗く皆人、上手くピントが合わせられずに一時間以上が経過していた。

「……………難しいな」

持っていたカメラはインスタントカメラ、高性能ではなく、時たま動かなくなったりもする。

本来なら、文と同じデジタルカメラで写真を撮るのだが、皆人は断った。

皆人曰く『見習いはまず基礎の基礎から習うのが良い』だ、文のデジタルカメラならピントを合わす事もいと容易いのだが、皆人の熱意を買った文も古いインスタントカメラを手渡したのだ。

さらには『折角飛べるなら飛んで撮影したい』等と馬鹿な事を考えたので折角ピントを合わせても、その場でグラつき、ブレた写真しか撮れない。

「仕方ない、もう少し高度を下げるか」

皆人が居るのは上空三〇〇m、幻想入りの際に落ちた高さと同じである。

写真が上手に撮れないのは高度による恐怖だと考え、ゆっくりと下降していく。

「やっぱり慣れないな」

人間には翼など付いていない、空を飛ぶには鉄の羽が必要であった、それでも人間は単体では飛べない。

それが実際に出来ていると慣れぬ浮遊感と高所の恐怖が精神を狂わせる。

「これぐらいで良いか」

高度を下げ、上空一五〇m、これでもまだ高い方である。

「次は絶対に」

カメラを覗き、再びピントを合わせる。

「うおっ！」

だが不意に突き飛ばされ、またもぶれた写真が撮れた。

「その人間！」

幼い容姿、背中に結晶の様な物を生やし、宙を浮く少女。

「えっと……………」

「あたいと勝負しよ！ 弾幕ごっこ！」

「だ、弾幕ごっこ？」

この幻想郷での正式な勝負方法、それが『弾幕ごっこ』である。揉め事の解決の手段に用いられるのが弾幕ごっこなのだが、一部では自分の暇つぶしで行う妖怪も少なくは無いらしい。

「アタイはチルノ、早速だけど弾幕勝負」

「いや、俺は弾幕が出せないから無理なんだ」

「人間って飛べないわよね、ならあんたは人間じゃないんじゃ？」

「まあ、そうだけど」

「ならば！ その手に持つてるのであたいを撮ってみてよ！」

幼女は皆人のカメラを指差す、だが皆人は再び山を撮ろうとカメラのピントを合わせながら言った。

「被写体が悪い」

「ムキー！ アタイの何処が悪いの！？」

「そうだな、あと地球が十一回位回転したら良いぞ」

「わかった、でそれって何時？」

「今から三四六八九六〇〇秒後」

「分かった……………アレ？ 何時？」

「十一年後だ」

「アタイの事バカにしてるでしょ！ いざじんじょーに！」

チルノは急に冷気を纏い、力を溜める。

その力はチルノの細い腕へと蛇の様に纏わせ、氷柱を飛ばす。

「うおっ、危ねえ！」

避け切れぬ数ではない、だが弾幕初心者に弾幕は危険である。

それに氷精であるチルノの弾幕は氷や冷気など冷たい物に関連し

ている。

弾幕の所為なのか周囲の気温は徐々に下がり、体力も落ちて行き、共に反応速度や瞬発力が落ちて行く。

「アタイは強いからこてしらべに……………氷符『アイシクルフォー』！」

チルノの背後に出現する無数の氷柱、連続で放たれる氷柱を避けながらシャッターを切る。

出てきた写真を見て見るがピントが合って無く、イマイチぼやけている。

「クソッ！ ダメか」

再びピントを合わせながら弾幕を避ける。

「次こそは……………」

再びシャッターを切る、目の前に迫っていた氷柱は消し飛び、代わりに一枚の写真が出て来る。

写真は弾幕の氷柱を綺麗に写し出していたが、肝心のチルノは氷の羽しか写っていないかった。

「アタイは止まらないよ！」

徐々に加速する弾幕の嵐、冷気で手がかじかみ、カメラさえまともに撮れなくなっ行って行く。

「これで、どうだ！」

不意に撮った一枚、これも失敗し、弾幕の氷柱かせ頬を掠る。

出てきた写真は弾幕は捉えているものの、肝心のチルノはピンボケしており、イマイチ分かり辛い。

「またダメか」

ゆっくりと飛行する中、再びレンズからチルノを見る、すると意外な発見に出くわした。

「何だアレ？」

チルノの頭部、花飾りの様な物を見つけた。

赤い綺麗な花、さっきまで着けていなかった物がチルノの頭に在ったのだ。

「まあ、良いか」

再びピントを合わせるがイマイチ上手くいかない。

「そこ！」

「うおっ！」

チルノの不意の一撃、皆人は氷柱を避け、シャッターを切る。

事故で撮った一枚の写真に皆人は驚いた。

「撮れてる……………」

チルノの左半身、多少のピンボケはあるがピントは合っており、チルノの愉快そうな表情が撮れていた。

「……………」

写真を見つめ、考えた皆人、再びカメラを構え、今度は写真を撮る集中力を半分に減らし、動体視力へ意識を回す。

チルノの方へ飛んだ、飛び交う弾幕を避け、カメラのレンズを通さず肉眼でチルノを見る。

「一考え《》イメージ、捉え、ロックオンそして……………」

氷柱が再び頬を掠り、カメラのレンズがチルノを捉えた。

シャッター
「写す！」

にとりの工房、面倒臭そうな顔で文が訪ねた。

「にとりさん、皆人さんがここに……………ぐっすり寝てますね」

「川で再びサルベージ、カメラも壊れてたけど今直し終わったよ」

にとりが普段着を脱ぎ、黒いタンクトップとジーンズ姿で機械を弄る、にとりは魔法使いから貰った服装を大分気に入っている。

晴輝は毛布に包まれ、ぐっすりと眠っていた。

「桜から連絡は受けました。氷精とやり合ったそうですね、まったく冬の氷精に人間が挑むなんて自殺願望でもあるのですかね？」

「彼が撮った一枚見る？」

にとりが手渡す一枚の写真、文はその写真を手に取り見ると、興味深そうな目で写真を見つめる。

「中々上手く撮れていますね、弾幕も一発ですが納まっていますし、まあ初心者にはこの位ですかね」

写真にはチルノが映っていた。写真の枠ギリギリに納まった氷柱、その後ろにチルノが構えている。

「褒めてあげたら？ 沈んでた時その写真を握り締めてたんだから」
「そうですね、そうしますか」

初めて撮れた写真を毛布に包まっている皆人の懐へと放り込む。

自然と皆人の顔が満足げに見えたのは夢の中で成功した写真を見て笑っているのだろう。

「そう思い、文は飛んで行った。」

「アレ？ 皆人は如何するの？」

09・記者見習いの試練（後書き）

主「次回は異変、ラブコメ二割増し、バトル三割増し、自重四割減で何時も通りの投稿となっております」

10 - 博霊神社

チルノと戦った翌日、文にデジカメを渡され、博霊神社へと連れて行かされた。

普段のまつたりしたムードから一変、皆人自身も緊張の海へ沈むとは思わなかった。

神社の一室に集められ、机を囲んでいた。

「これが問題の種……………」

緑髪の女性が机の上に転がせた種、これが『異変』を起こす物らしい。

異変とは幻想郷で起こる大規模な事件の事だ、十回ほど異変が起きていくらしく、大半が博霊神社の巫女である博霊霊夢によって解決している。

「まったくこんな物……………何で地上に在るのが謎だわ」

緑の綺麗な髪を右手で弄る女性、風見幽香、四季のフラワーマスターと呼ばれている、この女性が今回の一件を知らせたのだ。

「この種は本来なら魔界で咲くはずの毒の花、それが私の畑で育てていたのよ」

「花の除去を貴方が依頼するなんて……………明日はお賽銭でも降るのかしら？」

一人だけ緑茶を堪能し、炬燵で丸くなっているのが博霊の巫女である博霊霊夢、こんな体たらくな姿を見ると異変解決のプロだとは思えない。

「どちらかと言うとキノコが降って欲しいぜ」

能天気にならう金髪の少女、幻想郷人間最速の霧雨魔理沙、魔法の森と言う場所で店を営んでいるらしい。

「私はそうですね……………合体口ばとか浪漫ですね！」

二人目の緑髪の少女、妖怪の山に在る守矢神社の巫女東風谷早苗、少しずれた感性の持ち主だが、一応は妖怪退治のプロフェッショナル

ルである。

「それでこの種は如何いう毒を持っているのかしら？」

「霊夢が自分で脱線させた話を戻させる。」

「興味あり気に種を持ち、凝視する。」

「これはね、一応は食用で美味しいんだけど……………」

「食用と言う単語に反応した霊夢は立ちあがり、指をパキポキと鳴らし始めた。」

「さっきまで如何でも良さそうな顔をしていたが、何故か真剣な顔で腕を回し始める。」

「最後まで聞きなさい……………この種には魔界の瘴気が大量に含まれているわ、辺りに瘴気を撒き散らしながら成長し、やがては赤い花を咲かせるわ」

「ちよっ！ それってヤバいんじゃない？」

「魔理沙も最後まで人の話を聞きなさい……………咲かせると言っても満開まで二十年近くかかるし、何より貴方達は瘴気が微量でも出たら気付くはずじゃないの？」

「危険物の除去に主人公チームが集まるのは分かりますが……………」

……………何故私達が？」

「新聞記者はお呼びだけど貴方はお呼びじゃないわよ」

指を指された皆人、だが幽香の声には反応せず、深刻な顔で舌を向いていた。

「……………人間が私を無視するなんていい度胸じゃない」

「す、すいませんが自分は無視して話を続けてください……………」

……………」

「はあ……………まあ良いわ、この花は少し前に私の知り合いが危険だと言って全て油物にして食べたわ、でも何故か的確な数字で幻想郷にあるのよ……………全部で四つ」

「そりやまた具体的だな……………まるで誰かが持って来てバラ撒いちゃったのか？」

「その事は私が調べるとして……………この花の危険な所は一つ、

形ある物の体内で育ち、体の外で花を咲かせるわ。たった二日で「
「ッ！」

全員の表情が変わった、全員が真剣になり、話を真面目に聞き始めた。

「本来なら瘴気は外へ出るのだけど、それが後者なら別……………」

……………瘴気は体を巡り、普通の人間なら閻魔の所へ、妖怪、妖精、魔理沙と霊夢みたいに力を持つ者なら異常な力を得るわ、簡単にいえば氷精でも私以上の力を出せるわ」

幽香の話を聞いた皆人は顔色を悪くした。

何かに気付き、今すぐに心の引っ掛かりを取り除きたくて仕方なかった。

「も、もしも、幽香さんの話の氷精の花が成長したら如何になりますか？」

「そうね、瘴気は体を蝕み、死ぬか命尽きるまで狂うかのどちらかね」

その言葉を耳にした直後、皆人はポケットから写真を取り出す。

先日、チルノとの弾幕ごっこで撮った写真を見る。

「もしかして……………これですか？」

幽香に震えた手で写真を渡す。

眼を細めて写真を見る幽香は一気に顔を青くした。

「え、ええ……………」

それがまるで競技のスタート合図の様に皆人はその場を取り出した。

「み、皆人さん！」

出遅れて文が飛び出した。

それに続き霊夢、魔理沙、早苗も続いて飛んで行った。

10・博霊神社（後書き）

主「今回もハーレムが諦められない俺参上！」
皆「何言ってますか？」

11 - 氷精と蛙

妖怪の山の守矢神社。

「今日こそアタイが凍らせてあげてやる！」

「ふん、たかが氷精のくせに生意気だね……………今日は盛大に血祭りに上げてやる！」

守矢神社では今日も氷精チルノと諏訪子との激戦が繰り広げられていた。

氷精を食べる蛙、蛙を凍らせる氷精、犬猿の仲とはこの事だろう。

「今日のアタイはぜっこーちようなんだ！ 今日も元気に氷漬け！」

「昨日は負けたけど今日は神としての威光を見せるよ！」

諏訪子は構え、お手製の鉄の輪を取り出した。

両者、頭に血が上っている所為かチルノの頭の二輪の花に気が付かなかった。

「花の特徴は一つ、『好戦的になる』『力が増す』の二つ、絶対に見つけ出さない！」

それを聞くと五人は方々へと散って行った。

霊夢は賽銭……………情報集めの為に人間の里へ、魔理沙は魔法の森の方へ、早苗は文と皆人と共に妖怪の山へ急いだ。

「そう言えば……………俺がやられる少し前に『アタイつてば最強ね、蛙を……………』如何とか言ってた」

「なら守矢神社に急ぎましょう！」

幻想郷最速の名前は伊達ではなかった。

一瞬で皆人と早苗から距離を離し、一人で飛んで行ってしまった。
「クソツ速過ぎて着いてけないぞ……………」

「えっと……………皆人様……………で良いのですか？」

「え、ああ『文々。新聞』の手伝いをしてる若津皆人、東風谷さん

で良いか？」

「ええ、構いません」

「軽い自己紹介はしたし、とりあえず守矢神社へ！」

激戦地守矢神社、巨大な氷の結晶や辺りに落ちている鉄の輪を文は踏み歩く。

巨大な白蛇も凍らされていて、修羅場とはこの事を言うのかもしれない。

「息を殺して……………」

カメラを構え、歩く、不意の襲撃に備えるがその姿の敵の本拠地に放り出された一人の気弱な傭兵であった。

まるで木々の様に氷柱が立ち並び、戦地は異様な緊張感に包まれていた。

ピシイと足元の氷が割れ、音が響く。

「そこか？」

文の目の前に走る人影、その形相は不信感と緊張感に押しつぶされ無表情であった。

文が守矢神社に降り立ち数分後、皆人と早苗は二人で行動を共にしていた。

「構えといってくれよ……………」

「はい」

互いに声を押さえ、ゆっくりと進む、いつの間にか戦場一帯がサイバル化していた。

物音を立てれば敵に気付かれる、ここまで派手にやらかしていると二人の理性は飛んでいるのだと確信に近い物を持てた。

「てか、守矢神社にはもう一人神様が居るだろ……………そっちは？」

「神奈子様なら他の神の所へ飲みに行きました」

「イピカイエ……………仕方ない、ここは俺たちだけで」

皆人は足場に落ちている鉄の輪を拾い氷柱目掛けて投げた。

音を立て落ちる鉄の輪、それに誰かが反応したのか足音が近づく。

「とりあえず、隠れていてくれ」

「は、はい」

早苗は皆人の背後に隠れる、皆人はカメラを構えて動かない。

鉄の輪の落ちた場所へ誰かが近付いて来る、それをカメラに撮り捕縛する作戦である。

皆人のカメラは文と同じ仕様で、弾幕や人物を撮れば相手を一時的に無力出来る。

「三、二、一、写す！」
シャッター

シャッターを切った瞬間、カメラはある一枚を撮った。

それは右手だった、まるでカメラのレンズを覆う様に右手が写してあった。

「東風谷さん！」

皆人は早苗を突き飛ばし、カメラを放り投げた。

チルノの左手は先端の尖った氷柱を持ち、皆人の腹部を狙い刺した。

「くっ！」

チルノの攻撃は皆人の右腹部を掠るだけだった、皆人は肘と膝で氷柱の槍を砕き、左手でチルノの胸ぐらを掴み、力を込め頭突きをした。

「早苗さん、下がってて！」

晴輝は落ちて来たカメラを取り、構える。

「……………氷塊『グレードクラッシュャー』」

両手を地面に合わせ、チルノは呟く。

すると地面が青く光り出し、冷気に包まれる。

「皆人さん！」

早苗の声を聞き、全力でジャンプした。

さつきまで立っていた場所は巨大な氷塊が現れた。

「……………冷体」

チルノは眩き、消える。

「居なくなつた？」

辺りを見渡すが何処にも居ない、あるのは氷塊と早苗の姿だけであつた。

不意に皆人の腹部に謎の一撃が入る、その一撃は誰が何をしたのかが分からない、ただ腹部に激痛が残る。

「そこか！」

背後へシャッターを切るがなにも撮れない、だが頭部に衝撃が入つた。

「クソツ……………」

必死に考える皆人、不意に頭に非常識な思考が浮かぶ。

それは『目に見えぬ速さでチルノが攻撃している』だつた。

子供の様な単純すぎる考え、そんな事を考えている内に次の衝撃が背骨に入る。

「冷符『瞬間冷凍ビーム』」

耳に囁くような声、悪寒を感じた皆人は両腕をクロスさせ、防御の構えをした。

細長い超低温度の一線は皆人の左脚を凍らせた。

「うおっ！」

いくら浮遊しているとはいえ、空中でバランスを乱すと落ちるのは普通、左足もバランスをとる重要な役目を担っていたが凍りつき、歩行の役目すら放棄した。

目の前に現れたチルノは笑う事も無く、悲しむ事も無く、何の表情を見せずに人差し指で皆人を指した。

「こんの……………バカ妖精が！」

皆人はその場で無理に前に一回転し、凍りついた左足で踵落としを見せた。

踵はチルノの肩へ入り、チルノは表情を変えず、肩を押さえた。

「まだまだ！」

次にチルノの胸ぐらを掴み、体を大きく仰け反り、頭突きをした。
「もう一発！」

もう一度チルノの頭部目掛け、自分の額をぶつけた。
両者共に限界で二人一緒に地面へと落ちて行った。

「いてえ……………」

氷柱に凭れ、体を休ませる皆人、服は所々破れ、左脚は冷凍され動かず、腹部から血が出ていた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「ああ、ちよつと掠った程度だから……………いやあ、弱って無かつたら勝てなかつたな」

「そんな気楽に！ 今救急箱取って来ますから安静にしててくださいよ」

そう言うと早苗は神社へと走り去って行った。

チルノの頭の花は萎れ、皆人が触れると砂の様にサラサラの粉末となり風に飛ばされていった。

チルノはボロボロの格好で能天気には寝ていた。

「ん……………アタイは……………さいきよーなんだよ……………」
「まったく、まあ良いか」

その後意識を失い、四肢を投げだし皆人は寝てしまった。

11 - 氷精と蛙 (後書き)

主「アンケート機能がほしいですな……………」

12 - 守矢

皆人は守矢神社の一室で寝かされていた。

原因は緊張に押し潰れたからだ。

「それで…………… 諏訪子様は敵味方も気付かずに暴れていた……………と？」

早苗が仁王立ちし、諏訪子が正座していた。

救急箱を撮りに行っている際、何故か文と諏訪子が戦っており、流れ弾を数発貰った早苗は堪忍袋の緒を切らし、弾幕の嵐をぶつけた。

「あーうー、これには先祖代々から受け継がれる氷精を倒せと私の右手が唸るんだよ！」

「諏訪子様そつちは左手です」

チルノと諏訪子のケロ？対戦（笑）は終結した。

チルノは被害者であるので怒るのも気が引けたので諏訪子が全面的に説教を受けている。

「まあ、守矢の一件は守矢同士が解決するとして……………この瘴気の花の種は妖精、妖怪、霊、人間の全てに効果があります、私は新聞を使い危険な事を幅広く認知してもらい、守矢一家にもぜひ協力して頂きたいのですが……………」

「わかりました、幻想郷の為に努力します、それなので……………皆人さんの事なんです」

「紹介を忘れていました、彼は私の下で働く助手でして、若津皆人と言います」

「偶にで良いのですが彼とお話しさせてくれませんか？」

「え、まあ良いですが……………その代わり貴方の知っている守矢の暗部とか色々聞いて良いでしょうか！」

記者である文は情報を得る方法に手段は選ばない。

盗撮、盗聴は彼女の基本でもあったりする。

「そう言う事は神奈子様と話してください」

「あの人は逃げ道を多く持っているで逃げられたら逸らされたりするんですよ」

ため息を吐き、カメラを取り出す文、部屋から出て空を見る。

「……………皆人さんの事は心配じゃないんですか？」

「彼みたいな年頃の人間はこう言う湿っぽい嫌いますからね、放つとくのが一番ですよ」

「そうですか、では私は彼の包帯を取り換えてきますね」

早苗は救急箱片手にそのまま部屋を出て行った、気の所為かその瞬間早苗がとても良い笑顔を浮かべて行った。

「はーん、そう言う事が」

諏訪子は何かを悟った、そうしてまるで娘の成長を温かく見守る母親の様なうっとりした顔をしていた。

「んで？ 君は如何するのかな？」

「私は新聞を作って来ます、皆人さんが起きたら帰らせるようにしてください」

「君も中々逃げるのが得意だね、流石は新聞記者」

「褒めても何も出ませんよ」

文は翼を広げ飛び去って行った、その顔は少し切なさそうに見えたのかは彼女しか知る者はいない。

昼が過ぎ、日も沈み、辺りがすっかりと暗くなり時刻は七時前、幻想郷一帯は大雪に見舞われていた。

皆人も顔を冷やす冷気で眼を覚まし、体に巻かれた包帯を触っていた。

「打ち身と、擦り傷って所か……………良かった……………のか？」

実際、体を動かすと疲労と睡魔が精神を蝕む、再び温かい布団に潜りたいと言う誘惑に負けそうになってしまう。

だが誘惑に打ち勝ち、手際良く布団を片付け、部屋を後にした。

「寒ッ！」

縁側を歩く皆人、外は大雪で風も強く、帰るには視界が悪すぎる。

「明日は雪だるまでも作るか……………」

そんな能天気な事を言っていると前から早苗が歩いて来る。

「あ、皆人さん」

「怪我の手当てはありがとう、とりあえず帰らないと言いたいけどこの吹雪じゃ帰られないか……………」

「あの、ご飯食べて行きませんか？ 食べ終わる頃には雪も弱まっているかもしれませんし」

「え、でも」

「今日は鍋ですので大丈夫です、奮発してお肉もありますよ」

「お肉……………ハッ！ いや、悪いですよ、大丈夫です吹雪ぐらい……………」

タイミング悪く皆人の腹の音が早苗の耳へと入ってしまう、早苗はクスクスと笑い、皆人の手を引っ張って行った。

ぐつぐつと煮立つ鍋、それを囲む様に座る神が二人、先ほど帰って来た八坂神奈子と諏訪子であった。

「足音が……………神奈子、良いね」

「あ、ああ」

襖を開け、皆人が早苗に手をひかれ入って来る。

「ほお……………」

神奈子が無かを察したように声を漏らす、足を崩し、何時もの様に気楽にしている。だが諏訪子とは違うまるで娘の連れて来た男を見定める父親の様な鋭い眼をしていた。

皆人は数々のバイトから得た経験を身に沁み込ませ、今では直感

だけで今何をすれば良いのかが理解できてしまえる。

喉を詰まらせ、汗が噴き出る。

鋭い槍を向けられ、反撃の手を考える様な、そんな感覚に似ている。相手を見定める緊張感と心臓を握り潰す様な迫力、アルバイターには避けては通れない道が在る。

『面接』

その者の能力を測る為の試練とも言える、皆人はこれまで難なく面接をクリアしていたので忘れていた。

押しつぶされる様な緊張感、一歩間違えてしまえばそれでお終い。背水の陣に立たされた気分である。

「（試されてる？ 数々の面接で手に入れた秘儀を見せると気が本当に来るとは……………ん…やべえ、汗と震えが……………）」

鼻で大きく息を吸い、気持ちを落ち着かせる。

「どうも、若津皆人と言います」

「諏訪子から聞いている、まあ座れ」

それを聞き、皆人は正座をした。

「堅苦しいな、足を崩しても構わないんだぞ」

「あ、はい」

皆人は神奈子からそれを聞き、足を崩す、こつという厚意は度が過ぎない程度で受け取るのか一番である。

「早苗、酒の準備を」

「はい」

早苗は酒を取りに部屋を出て行ってしまつ。

場は静まり返り、鍋の煮立つ音が部屋の空気をより一層重くした。

皆人は面接と言う物が苦手であった。

相手が何を考えているのか、自分は如何いう行動をすれば良いのか、そして何より後の無い背水の陣と言言葉が何よりも苦手であった。

「朝はありがとね、いやあ、ああなると止まらないんだよね私」

切りだしたのは諏訪子であった、彼女の顔を見ると軽くウインク

をして、アイコンタクトを取る。

朝の一戦の件、あの事に悪気を感じているのか、手伝ってくれるのだと思い、話を繋げる。

「いえ、自分は別に何もしてません」

「またまたあ、早苗を助けてくれたし、私達は感謝してるんだよ」

「ああ、私からも礼を言うよ」

「それでさあ、早苗の事を如何思う?」

「如何思うとは?」

「可愛いとか好みだとかそういう外見や内面の話だよ」

「綺麗ですよね、何と言うかこう、気品が在って素直で、少し抜けてそうだけど可愛らしいという……………か」

まるで蛇に睨まれる蛙が如く、神奈子は皆人をさつきより鋭い眼で見つめていた、その背後にはとぐるを巻く大蛇の姿が見える。

皆人は咳を一つし、「自分とは比べ物にならない素晴らしい方だと思います」と言い直した。

大蛇はそつと身を隠した。

「(今のを言い続けてたら喰われてた、確実に自殺ルートだった、何だ東風谷さんは触れない方が良いのか?)」

「ねえ、体の方は如何思う?」

「か、体!」

気の所為か神奈子の背後から『ゴゴゴゴ……………』と言う謎の擬音が聞こえて来る。

「(あ、あれ可笑しいな体が震えて来るぞ? 寒いのかな? かな!?)」

「いやだなあ、肌の色とか身長とかそういう話だよ、如何いう話だと思ってたの?」

「(体型とか胸の話だよバカヤロー! 解るか! 体の話で肌の色とか身長とかではなく、あの大きなメロンが気になるわボケ!)」

彼女は渡り船を出す女神ではなかった、ただ空から高みの見物をしている鳥だった。

「（クソツ、泥船に乗らされた気分だよ！）」

挽回の手立てを考える皆人に神奈子から一喝。

「早苗を厭らしい眼で見たら消すぞ……………」

神の一言だったのか、母親からの一喝だった所為かその言葉には重みがあり、間違えればアルマゲドンの引き金を引く事になるだろう。

「はい……………」

皆人は既に涙目であった。

「神奈子様、諏訪子様」

だが本当の恐怖は目の前の二神ではなかった。

神奈子の背後に立つ酒瓶を持った早苗、顔は笑っていると言つのに、背後に何かを出していた。

蛙とか蛇とかではない般若そのものだった、その顔は微笑みを止めず、諏訪子と神奈子の間へと座る。

「さ、早苗？ 怒ってるのか？」

「いえいえ、神奈子様、私はこの程度じゃ怒りませんよ」

とか言いつつも、酒瓶を握る手には血管が浮かび上がるほどの力を入れている。

「わ、わかった、まだ私の反省が足りなかったんだね！」

「違います諏訪子様、私はただ恩人でもあり客人でもある皆人さんを面白半分に『冷やかし』たり『消す』と言う毒を吐くのは如何なものかと……………」

「いや、別に気にしてませんよ！ 偶に友人とかに冷やかされたり、毒吐かれたり…………… いえ何でもないです」

蛇睨みの眼光、二人の弁解が喉の奥へと戻ってしまう。

「ちよつと向こうでお話ししましょうね……………」

12・守矢（後書き）

最近、パソコンばかり触っていて親に「受験大丈夫か？」と言われしました。

心にぐさりと刺さる物がありました。

自分は得意科目『妄想』『計算』の二つしかないので心配です。

今週の金曜にテスト（明日だけ）がありますので必死に勉強しようと思います。

とりあえず目標の点数を目指すために（ストックがないので）土曜日は休日になりたいと思います。

皆さんも勉強頑張りください、努力すればいつか神はほほ笑むと信じて。

13・男の周り（前書き）

タイトル変更しました。

読みは『東方働楽録』

『とじほじどじひらくる』です。

13 - 男の周り

夕食後、勢いを増すばかりの吹雪の中を決して帰宅しようとするが東風谷さんに止められた、とりあえず選択肢は『神社に宿泊』か『遭難して凍死』のどちらかだった。

渡された布団を一室に敷き、そこで寝る事にしたのだが、寝る寸前に東風谷さんが枕を持ってやって来た。

「あの、外のお話とかして貰えませんか？」

男女が同じ部屋で寝るのは如何かと思っていたが、持って来た枕で顔を隠し、恥ずかしそうにこちらを見る姿は正直反則であった。

敷いた布団の上で話をした、何を話せばいいのか解らず仕事関連の話をしたが不評だった。

本人は面白いと笑っていたが遂には欠伸を出させてしまう。

そこで趣味である海外映画の話をする以外にも好評、日付が変わった事も知らずに話しこんでいた。

「それでさあ、ダイハード5の情報があってさ、またもあの人事件に巻き込まれてんだよ」

「本当にお好きなんですな、映画」

「ああ、昔っから映画好きでバイト代の大半はDVDとか映画とかに消えてったよ」

「ご両親は如何したんですか？」

「両親は分からない、孤児院育ちだし、名前もとある人から貰ったんだ」

「す、すみません、そんな事も知らずに」

「………少し昔話をしているか？」

三日月が天高く上がり、誰もが寝静まった孤児院。

「よし、いいぜ皆人」

「オーケー、荷物渡すぞ」

一m程度のレンガの壁を男二人が挟むようにして立つ、片方の男は孤児院の外、もう一人は孤児院の中である。

「深夜の逃亡劇……………くうううう！　こう言うのに憧れる！」

「うるせえ。皆人、少しは静かにしろ」

皆人が男に荷物を渡し、皆人が壁を超えて孤児院を脱出した。

「案外あっさり抜け出せたな」

「確かに、まあ、明日になっても搜索願は出ないだろうな」

俺達の孤児院の人間は最悪だった、孤児院の管理を孤児自身にさせ、自分はパチンコや賭場ではしゃぐダメ人間だった。

それで孤児総勢五人は脱出を決行した。

奴は孤児一人ひとりの顔や名前すら覚えていない馬鹿だ、なので通帳やら食料やらが無くなっていても気付きはしない。

「如何する？　関東に逃げるか？　関西に留まるか？」

「関西の方が良いだろ、田舎が良い、生活費が安く済む」

「こう言う事は俺よりお前の方が頭いいな皆人さんよお」

「お前が馬鹿なだけだ」

そんな会話をしつつ歩いて関西を放浪した、偶に警察に声を掛けられるが直に撒いて逃げた。

そして着いたのが月一万弱のボロアパートだった。

二人でバイトをして、一緒にバカやって春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ四年が流れた春の日、アパートには皆人しか帰ってこなくなった。

一人での生活は自由が無く、毎日が厳しい状況下だった。

一週間水飲みの生活や、調味料だけで過ごしたり一年が経った。

「何だよこれ」

何故かドアの前に何も書かれていない履歴書とボーダー商事のチラシが置いていた。

「……………」

まるで花の蜜に誘われた蝶の様に気が付けば封筒に履歴書を入れ、神社の前に立っていた。

「お願いします……………」

賽銭箱に封筒を入れ、神社を去った。

その一週間後に紫と出会った。

まるで消えた男が、俺を地獄の様な節約生活から抜け出させてくれる為にしてくれた恩返しだったのかもしれない

「とまあ、こういう過程があり居間に至るってわけだ」

「不思議なお話ですね」

「ああ、他の孤児仲間も死んだ死んだって言ったけど、俺は幻想郷で生きてるんじゃないかって思うんだ」

「そうだと良いですね」

「ああ、ふわあ……………」

大きな欠伸をして布団に横になる。

「そろそろ寝ましようか」

「何か、忘れてる様な気が……………くかー」

「……………助けてくれてありがとうございます」

早苗は皆人の手を握りそう呟く、本人が寝てしまっても思いは伝わったと信じ、寝てしまった。

13 - 男の周り（後書き）

皆「どうしてタイトル変えたんですか？」

主「いや、友人に『タイトルがイマイチ』とかバツサリと言われましてね、

考えたのが『道楽』ですよ、道楽と働くを上手く合わせた造語ですよ。

意味は働く事を楽と考えるですよ。

後、友人に『小説家になりたかつたら文章だけで読者泣かせてみる！』とかも言われまして、恋愛＋シナリオ＋時たまギャグ重視で書かせていただきます」

14 - 新しい始まり

妖怪の山は一面白く覆われた、雪が積もり、皆が除雪作業をしていた。

「昨晚はお楽しみだったそうで………」

文は何故か不機嫌そうな顔でそう言った。

「仕方ないだろ、冬なんだし大雪で帰れなくなっても」

皆人は普段通りの薄着の格好で守矢神社に作られた大雪を眺めていた。

「寒くないんですか？」

「凄く寒い但我慢我慢、貧乏だったし、着る服が清潔だったらまだ良さ」

皆人は雪を素手で触り、形を作っていく。

「雪はどんどんと形を成し、次第に一つの造形物になって行った。出来た」

雪は刃渡り一mの巨大な刀へと変貌し、雪独特の白い輝きを見せていた。

「白狼の雪太刀」

四角形の台座に刀を突き刺した様な造形物、それは白く美しく輝いていた。

「貴方は本当に何者ですか！」

「ハツハツハツ褒めても良いぞ！」

文に自分が何者かを尋ねられたが胸を張り、人間ですと答える皆人。

「これが本当の天狗ですね」

「私が！ この清く正しい射命丸が天狗です！」

「いや、そう言う意味で早苗さん言ったんじゃないと思うけど」

そんな会話をする中、不自然な雪の塊が皆人の視界に入る。

何故か高く積もる雪、素手で雪を覗いて行く皆人の手に何かが触

れる。

「……………手？」

もつ少し深く搔き分けると次に見覚えのある帽子が出て来た。

円らな瞳の着いた帽子、そして謎の手、朝つばらから何か見当た
らなかつた人物。

「諏訪子様あああああああああああああああ！」

皆人の人生の中でこれほど驚き、大声を叫んだ事は無いだろう。

雪を取り除くと諏訪子が幸せそうな顔で永眠的な意味で寝かけて
いた。

「それでねえ……………私つたらおこたの中で蜜柑食べてたんだ

けど、何か体が凍えてね……………」

「蜜柑違う！ それ雪！ 起きてください諏訪子様、死んじゃいま
す……………よ？」

諏訪子を掘りだすが諏訪子の手になんか捕まっていた。

それも人の手、そう言えば昨夜から諏訪子と共に神奈子も居な
かつた気がする。

素手で雪を搔き分け、手が霜焼けをしているが構わずに掘り続け
る。

「か、か、神奈子あああああああああああああ！」

人生最大の叫びは再び妖怪の山を木霊した。

「いやあ、危うく冬眠しかけたよ、アツハツハツ！」

「いや諏訪子、冬眠どころか永眠しかけたんだが……………」

二人を熱湯風呂へ服を着たまま投げ入れ、湯を頭にかけてながらゆ
つくりと解凍し、冷凍保存されかけた二神を再び現代へ呼び戻した。

「まあ、大方早苗さんに外に放り出されて寒さ凌ぎにかまくらでも
作ってたんでしょう」

「いや、吹雪が止んだ頃に暇だから雪合戦してたら諏訪子と共に疲
れて寝てしまってたな」

「あんだ等、たかが雪合戦で死にかけてどうする……………」

「いやあ、そう寝めないですよ。ねえ神奈子もう一戦する?」

「そつだな体も温まったし……………」

「……………あんだ等二人が神だと言う事に疑問を感じるよ」

「悪いな、展開が速すぎて読み込めない、何だつて?」

集めた雪を広げ、山を作り、壁を作り、かまくら、雪だるま、等身大スケール椀等を作り、何故か文、椀、俺と神奈子、諏訪子、早苗の三対三に分かれて雪合戦をする事になった。

文も既に大雪の事を新聞にし、ネタを探して暇だったらしく、参加し、椀も連れて来たのだ、何と言うか常識人が早苗と椀、非常識人が諏訪子、神奈子、文だった、自分より偉い神を吹雪の夜に投げだす早苗も早苗なのだが。

常識人と非常識人の温度差が激しい、例えるのであれば北極とエジプトぐらいの違いだ。

「と言つ訳で、守矢一家対天狗組+おまけ、雪合戦大会!」

諏訪子が景気良く大声で切りだすがテンションが上がらない俺と椀、早苗は空元気でテンションを上げ、文に関しては「神に勝てば私は神の幻想郷最速!」とか言つてやる気満々である。

「おまけ……………ねえ」

だが皆人の闘争心に火が付いた、まるで自分が戦力にならない様な数え方だったのが気に食わなかった様でポケットから何かを取り出す。

「あや? それは何ですか皆人さん」

「……………塩」

皆で使える豆知識、雪に塩をかけると化学反応で雪が硬くなるよ、かまくらを作る際には使おう、リア充野郎を冥土へ送るときは塩で固めた雪玉で相手を殴りつけよう。

14 - 新しい始まり (後書き)

主「皆は真似しちゃだめだよ！」

15 - 真相と真実

諏訪子、神奈子、文、皆人の四人で愉快に丸めて固めた雪玉が飛び交う守矢神社の境内、突如スキマが現れた。

「楽しそうね……………」

皆人は紫の前に正座させられ、

「いえ、すいません」

つつい雪合戦で熱狂し、自分を拾ってくれた紫の顔面へ塩で固めた雪玉をぶつけてしまった。

「まあ良いわ、皆人、貴方は里へ行きなさい」

「里？ 何か用事でも？」

「除雪作業の手伝い、昨日の猛吹雪で人間の里が雪で埋もれてるのよ、偶には人助けもしてみたら？」

皆人が「そう言う考えも妖怪にもあるのか？」と言えば話は続く。

だが皆人は何も言わずに頷いた。

人間、妖怪と区別するのは流石に失礼である、同じ世界に生きる者であるのだから同じ扱いをしなければならぬ。

「スキマから行きなさい、そっちの方が速いから」

紫は扇子を開き、同時に里行きのスキマが開通した。

「文さんに話通しといてくださいね」

「ええ、行ってらっしゃい」

皆人がスキマに入る、紫は扇子を閉じると同時にスキマを閉じた。

「あやや？ 皆人さん何処ですか？」

「ちよつと里まで働きに行つたわ」

……………スキマ妖怪がこんな所に如何したんですか？
文はカメラを構え、距離を取る、だが紫はそんな文に眼向きもせず、神社の方へ向かって歩き出す。

「少し、この神と話するだけよ」

「私も貴方に個人的な取材をしたいのですがよろしいでしょうか？」

……………

「そうね、私も彼の生活を知りたいし、貴方にもこちら側に来て頂きたいと思っていましたの」

扇子を広げ、自信のポーカークーフェイスを保つ、だが不気味なほどに口元は笑っていた。

皆人は里へ来たのだが、目の前に広がる光景は白銀の世界、里など言える者は無かった。

「何だこれ？」

その言葉意外なにも出なかった、降り積もった雪の量は多く、太股が埋もれるほどだった。

「里は何処だよ……………」

そう言っただけで歩くが面倒になり、飛行する。

近くに在るのは森と赤い屋敷、そして方向を変えれば妖怪の山、場所からして里の反対側だろう。

「畜生、仕方ない、飛んで行きますか……………」

皆人は空を舞い、適当な方向へ飛ぶ、数分ほど経って、人里が見えてきた。

そつと着地し、里へ入ると誰もが屋根の積雪に困り果てていた。

「とりあえず手伝うか」

先に行ったのは老人が梯子に上ろうとしている家である、老人を説得し、スコップを借りて雪を払いのけて行く皆人の姿を見て他の人々が依頼にやって来る。

あつという間に皆人は『気の良い外来人妖』と言われ、一躍有名になって行った。

守矢神社の一室、紫、諏訪子、神奈子、そして文の四人が座っていた。

「それでは話し合しましょう、これからの幻想郷の未来永劫の為、

そして幻想郷に住む娘たちの為に」

15 - 真相と真実（後書き）

主「ババアの陰謀………グホアっ！」

16 - 語られるの真実か

守矢神社の薄暗い一室に集う四人、陽気な雰囲気は消え去り、重い空気が全員のを固く閉ざした。

「誰も喋らないのであれば私から……………」
扇子を広げ微笑む紫、その笑みも一瞬で消え、真剣な表情へと変わった。

「私達がしているのは幻想郷の『支配』」

「支配……………自分の思い通りの駒を作ろうと言う事ですか？」

少ないヒントから導いた文の考えは紫の首を立てに頷かせる事は無かった。

「『コントロール』ではなく『去勢』とでも言いましょうか……………」
「……………一年前、自分のテリトリーを守る為に人間を八つ裂きにした『お花妖怪』の事は覚えているかしら？」

「風見幽香……………」

幻想郷には『太陽の畑』と言う向日葵畑がある、ちょうど妖怪の山の反対の方角である。

そのこの主の風見幽香と言う妖怪は『フラワーマスター』と言う可愛らしい名前とは裏腹に『妖怪最強』の異名を持つ。

「あやや、確か外来人が風見幽香の庭に入り、跡形も無く消された奴ですよ、一年前の……………」

「そう、彼は私が連れて来て、彼を畑に行かせたわ、一人で……………全員が生睡を飲んだ、簡単に言ってしまうえば間接的に人間を殺している事になる。」

「別に私は拒否しても構わないと言ったわ、でも彼は三つの条件を飲んでくれるのなら良いと言ったわ」

紫は右手を前に出し、親指と小指以外の三つの指を立てた。

「要求は『自分の事を外界から完全に抹消する事』『自分の名前を

昨晚皆人と会話をしていた、皆人自身は死んだ友人の事を覚えていた。

早苗はまるで今来たかのように表情を繕い、襖を開け、湯飲みを全員の目の前へ置き、部屋を後にした。

16・語られるの真実か（後書き）

主「文語力に自信がありません……………」

幻想郷へ来て十日が経った夜、毛布に体を包み、白い息を吐きながらも日誌のページに今日の出来事を書く。

恩人の紫の注文が多く、人間の里や迷いの竹林などへ足を運ぶ事が多くなった、もしも社員として採用されれば色んな所へ派遣されるが、現状満足であった。

宙に浮ける人間と少し里の人間には差別される事があるが、除雪作業の手伝いか里の皆とは仲良くやっていけている。

里では慧音さんや妹紅さん等の友人も出来た、新しい出会いが楽しみでもある。

「さてと、寝ますか……………」

毛布に包まり、固い地面に横になる、だが冬だと言つのに今度も薄着で眠れなどしなかった。

外を眺め、雲ひとつない夜空には無数の星が散りばめられており、皆人の悪心が眼を覚ます。

「ふあ……………如何しました、皆人さん……………」

文が眼を覚まし、布団の上へ体を起こす。

「ちよつと散歩、文は寝といてくれ、明日はゆっくり休んでいいぞ、俺がついでに配つとくから」

文を再び寝かしつけ、毛布をマントの様に着け、ウッドハウスを出た。

「さてと、少し飛んでみるか……………」

浮遊能力を手に入れ、一週間が過ぎた今、自由自在に空を舞う事が出来る様になった、だが文と一緒に飛ぶ事は未だに……………一生出来ないだろう。

「遊覧飛行でも楽しみましょうじゃありませんか……………」

夜空を舞う皆人、その眼に少年の様な輝きを宿らせ、適当な方向へ飛んで行ってしまった。

三分ほど飛行し、体が冷えて来たので地面へ降り立ち、冒険をしていると八目鰻の屋台が眼にとまった。

鰻の良い匂いが心なしか体全体を温めてくれる。

「いらっしやいませ」

マントにしていた毛布を丸め、達筆な字で『うなぎ』と書かれた暖簾を潜ると女将の様な可愛らしい姿の少女が出迎えてくれた。

「すみません、鰻を一つ」

背中羽を見る限り、彼女も妖怪なのだとは理解は出来たが他の妖怪の先客が居た。

「酒だあ酒持つて来い！」

「いい加減にしな、財布の紐が緩み好きだよ！」

泥酔の息を超え、顔真っ赤にして酒を要求する頭に二つの角の生えた少女、そして顔を赤面させるがまだ理性の残っている狸の尻尾を着けた少女、一目で人間でないことが理解出来た。

「たつく、鬼つてのは酒を水みたいに飲みたいのかい？」

「酒は私の生命線、アルコールは私の活力剤！」

「すみません、隣良いですか？」

「ああ、良いよ。私らこそ騒いじゃって悪いね」

「いえいえ、妖怪も人間も飲んで騒ぐのが一番ですから」

と言っても自分は酒を飲まない、別に二十歳じゃないからではない、酒の席で酔ってしまえば他の奴らを止める人が居ないからだ。

文は最近俺が居る所為か酒を良く飲み、赤裸々な思ひ出話を暴露している、当人は覚えてはいないが、最近下着が小さくなりすぎて困っているらしい、実際は体が成長しているからではないのかと思っっている。

「はい、どうぞ」

妖怪の少女は鰻の蒲焼を皿に載せ、出してくれた。

それを受け取り、香ばしく焼けた鰻に噛り付き、口の中でよく味

わい飲み込む。

「美味い！」

声を上げて言ってしまう、だが美味しい物は美味しいのだから仕方がない。

「うん、こんな森の中に店を開かなくても里とかに行ったら絶対繁盛するよ」

「いやあ、少し有名人と言つか何と言つか……………」

少女は少し照れくさそうに頭を掻き、いそいそと鰻を焼き始めた。

「お主、名は？」

「俺は若津皆人、人間」

「俺は二ツ岩マミゾウ、妖怪だよ」

マミゾウの隣の少女は片手を上げ、手を左右に振り出した。

「私は鬼の伊吹萃香ああああ」

そう言い終わると手から力が抜け、そのまま重力に逆らう事なく落ちて行った。

萃香を除き、マミゾウと会話を始める二人、皆人はマミゾウに酌をし、鰻を食べている際、皆人が口を開いた。

「マミゾウさん、弾幕の放ち方つてのを教えてくれませんか？」

「力のない人間が弾幕の放ち方何か知って如何する」

「一応は放てるんですよ、ただ弾幕何て数えるほどしか見てないんでイメージが湧かないと言つか……………」

右手の平を広げ、力を込める、そうすると銀色の球体が手の平の上で形を成そうとしている。

だが皆人に潰され、球体は消えてしまう。

「まあ、良いじゃろうその代わり 事は師匠と呼べ」

「師匠…………… それでは師匠、ご指導よろしくお願いします」

「うむ、良いじゃろう」

既に日が上るうとしている今、妖怪の森で一組の師弟が生まれる。

17・師匠（後書き）

主「マミゾウさんはやっぱり東方五老衰の新しry」

「.....」
文は自分の財布を握り締め、家を飛び出した。

修行は守矢神社付近の大きな池で行われた。

神奈子、諏訪子には承諾を得ている為、多少ド派手にやっても構わない。

池に無数にある柱の上へ座り、マミゾウの授業が始まる。

「弾幕は周りの状況をいち早く判断し、弾を如何避けるかをする遊びじゃ、殺しにかかってくる妖怪も居るが、はその類ではない。」

とりあえず実戦が一番、無理だと思ったら池に飛び込めばいい」

「あの師匠、冬だから飛びこんだら凍死します」

「嫌なら必死になって弾幕を避ければいい」

単純な事ほど難しい事は無い、選択肢は『弾幕に当たって再起不能』か『冬の池に落ちて凍死』の二択である。

「それにしても寒い格好じゃな」

皆人の服装は変わらずの薄着、それも色が落ち、色んな所が解れている。

「服は欲しがらないのか？」

「別に肌さえ隠せれば構いませんし、余裕がありませんからね」

人間である皆人には妖怪と戦える程の力は持ち合わせておらず、カメラと香霖堂で手に入れた武器が命綱であった。

最近では木刀を買い、財布の中も余裕はない。

「.....まあ、本人が良いのなら構わんが」

「それではよろしく願います」

皆人は古ぼけた鞆からカメラを取り出すがマミゾウがカメラの所持に反対した。

「そんな意味のわからない物を使わんと素手だけで掛かって来い、若いのだからそれくらいは当然じゃ」

カメラを鞆に仕舞い、池のほとりへと置き、池に神々しく聳え立

つ柱の上へと飛び乗った。

手を前へと構える態勢をとるマミゾウに対し、皆人は直に足が動く様に軽い運動を始める。

弾幕を避けるのに必要なのは『俊敏さ』『知力』『体力』そして僅かでも良いから『根性』である。

ヘタレならば足が竦んで動けず、上半身と下半身が分離か消滅するだろう。

「よし、まずは基本から」

刹那、彼女から放たれる無数の弾幕。

マミゾウが弾幕で見えなくなった。

正確には弾幕の精密さが死角を作った。

その死角はあまりにも大きく、そして避ける幅が人がギリギリ入り込める程しか無かった。

弾幕の中を潜り抜けるが息が上がり、気が付くと弾幕と自分の頬が擦れていた。

「あああああああああああああああ！」

弾幕を避ける為体を捻るが態勢を崩し、肌寒い冬の池へと落ちて行った。

「うう……………面目ない」

「全くだな、人間辞めたら多少は視力位上がるかも知れんぞ？」

池で凍え死にそうだったマミゾウが皆人をサルベージし、現在焚火の前に人間を辞めるか相談を受けていた。

「まだ人間で居たいです……………」

「なら体を鍛えるのが一番、これを着けてみたらどうじゃ？」

渡されたのは鉄の輪であった、まるで罪人が着ける様な拘束具に似たそれが四つ、皆人に手渡された。

「重っ！」

「一つ二貫の鉄の輪じゃ、手首足首に着ければ嫌でも筋肉が着いて

来るぞ」

二貫、尺貫法で一貫は三、七五?で、一つ七、五?、それが四つなので現代で言う三十?である。

「時が経てば着けている事を忘れるだろう」と呑気に呟くが普通の人間は三十?の体の変化など直には着いて行けない。

だが皆人はそれを黙って道具を着けるのであった。

18 - 修行（後書き）

主「次回はついにデレエ丸の登場じゃない！」

19・少女の買い物

妖怪の森の前、一件の木造の家屋が香霖堂である。

その香霖堂に珍しい客が二人来ていた。

「それで……………君は何が御所望なのかな？」

「男物の服、貴方ぐらいの体格の服を探しています」

「何で私まで……………」

香霖堂には鴉天狗と白狼天狗の二人が店の中を歩き回っていた。

店の中を物色して行く文、そして何故か耳を引っ張られて着いて行く。

「男物……………ああ、彼の服か」

「いえ、椀の男装写真集でも作る……………」

「作らなくて結構です！」

素直に自分の心を表現できないと言うのはある意味厄介なのかもしれない。

「でもここにあるのは外界の服ばかり……………彼がこっちに

住みつくのだから里とかで売ってる品の方が良いんじゃないか？」

ハンガーに掛けられたパーカーを見て口を固く閉ざす文、そんな姿を呆れたのか空気を読み、椀が口を開く。

「恥ずかしいなら恥ずかしいって言えば良いじゃないですか」

「だって……………男の人に何かプレゼントした事ないし、気に行つてくれるか如何か分からないし……………」

頬を膨らまし、パーカーを見つめる文、自分が今どんな顔をしているのか気付いていないらしい。

「そう言えば、彼は黒い色が好きだとか言ってたな」

「ッ！」

「あと出来れば活発に動きやすい服が良いと」

「ありがとうございます！ 行きますよ椀」

椀の尻尾を片手で強く握りしめ、文はそのまま香霖堂を出て行く。

っていた。

皆人の思考はカメラを構えた一人の記者を思い出す。

「文……………」

中の服を取り出して見る、黒い生地、それは現代のポリエステルのような物ではない、不純物の一切ない絹で出来ている高価な物だった。

「こんな物貰つても良いのか？」

他人の好意を素直に受け取るのも礼儀、だがこれはあまりにも高価すぎた。

皆人の仕事では特に疲労を感じる物は無い。

新聞配達、アシスタント、買い物、弾幕ごっこでの囿役、身代り、盾、様々な仕事をしたが高価な物を貰うほどではなかった。

「明日から倍頑張ろう、いや三倍か」

そう思い服を着替えて行く。

皆人は初めて貰った給料がこんな素晴らしい物だった事を忘れ無い、そう心に近い、長い袖に腕を通した。

「あやや、まさかあそこまで服を選ぶ事が難儀だったとは思いませんでした」

里で色々な服屋を見て回ったが、男物の服を選ぶ事に縁の無かった私は正直テンパって居た。

どれもこれも同じに見えてしまい、全ての服を纏めて買ってやるうか、とまで思うぐらいだった。

そこへ八雲紫が隙間から上半身を出した。

暇だったからと言う理由もあるが、冬眠前に少し遊びたかっただけだったのかもしれない。

後に紫に頼み、置き手紙と服を家に置いて貰ったのだが。

「心配……………何か絶対裏が在ると思う」

紫の性格上、そして思考の大半は自分の娯楽しか考えていない事

を踏まえ、『何も無い』と言うのは無理な話である。

「服を女物に変えたりとかしてたら……………そう、でっち上げてやるわ！」

一瞬言葉が詰まったのは大妖怪に対し、自分が何を出来るのかを脳を必死に回転させ、結論を導き出す為の所要時間である。

「ただいま戻りました……………よ」

私は眼を丸くした。

彼が買った服を嬉しそうに着ていたのだ。

まるで無邪気な子供を思わせる様に、黒い服は彼の何かを引き出していた。

「あ、文、この服良いぜ凄く気に入った」

無邪気に笑う彼は私の心を苦しめる。

何時からだろうか、氷精が暴れたあの日からかもしれない。

彼は必死な顔をして戦った、奇跡的な勝利に満足している彼の顔を取る時、鼓動が一瞬だけ早くなった様な気がした。

その晩、彼が居なかった事に何故か腹が立った。

自分でも馬鹿げていると思うが彼の事になると胸が以上に熱くなる。

私はもしかして彼に……………。

「おーい、聞いてますー？」

「……………あ、はい聞いてます！ その服多少値をはる品なので大切にしてくださいね」

「ああ、大切にする！」

また鼓動が速くなった様な気がする。

だけが私の思っている物なのか結論付けるのは後にしよう。

今はまだ仕事仲間と言う事で満足しよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3915x/>

東方働楽録

2011年11月28日07時49分発行